

非常に主人の機嫌が悪くて、洵に困り果て、終に又酒を沾つて来て主人の機嫌とりを爲したといふ咄しがある。都べて明日からといふ人は、大概皆斯んなものである。

言へば必ず實行すべし

又斯ういふ奇談もある。或る處に一青年あつて語るやうには、己れの兩親はまだ存命で居るが、どうか死なれる時には別の日に死んで貰ひたいものだ。友人某の如きは兩親が同じ日に死んだので、大事な兩親の忌日を一處に弔つて居る。どうもあれでは物體ないやうな氣がすると謂つて居たさうである。然るに其の人の案じて居た通り、其の兩親が同じ日に死んだのである。後日朋友が其の兩親の忌日に當つて其者を訪へるに、彼れは午餐に魚肉を味ひつゝ、而も酒を飲んで居つたので、友人は大いに驚いて言ふやう。貴公は嘗て兩親が別の日に死んでくれるやうに致したい、同じ日に死んでくれると、忌日を一つに勤めることになる、それでは物體ないと謂つて居たてないか。然るに今や其の兩親が同日に死なれたのに、一日の齋もせず、而も午餐に肉を喰らひ酒を飲むとは、餘りのことでないかと詰つたさうである。處が其の人はよき口實を設けて、

修養は毎朝の洗面如くなれ

兩親の精進を一つにするのは、どうも物體ないやうな氣がする。そこで今此に一寸シキリを入れて置くのだと謂つたといふ滑稽咄しがある。事實こんな人はマサカあるまい。しかし自分の嘗て心に想ふたり、また口に謂つたりしたことを、後になつて之を執行する人が存外少ない。殆んど忘れて居るやうな人が多いやうに思ふ。此の如き人は此の滑稽談に似合て居るではあるまいか。之を要するに、修養は恰も毎朝起きると必ず面を洗ふやうな工合にやらねばならぬものである。何人も明日の顔を今日洗つて置かうとする者もあるまい。いが又今日の洗面を明日に延ばさうとする者もあるまい。唯其の日の顔を洗ふに止まつて、明日以後の考へとしては少しも有つて居ないのである。食事を爲すのも亦た之に等しく、三度ながら其の日の飢を凌ぎ、又必要の滋養分を取るに止まり、明日になれば又改めて食を爲すことあるも、今日の食を明日に送るといふやうなことは、斷じて無い。修養の唯其の日にあること、亦た全く之に同じと謂つてよ。

喩へば吾人が此に富士山に登るとせんか、仰いで富士山を視るの必要は少

しもあるまい。最初富士山に登つて見たいと思ひ立つたのは、唯心の中に畫ける理想である。目的である。實行でない。實行は歩行である。即ち仰いで富士山を視るよりも俯いてよく足元を視、歩々の進行に少しても油斷のないやうにするのが最も必要である。歩々の進行に油斷のある者は、到底目的地に達するとは出来ぬ。歩々の進行に油斷なきものは、必ず其の目的地に到達する時節の來ることがあるに相違ない。獨り修行に限ることとて無い。人間萬事今日の注意にあること眞に此の通りである。

昔時、東京市市ヶ谷邊に、一の藥種屋があつて、其の家の老人は深く眞宗の教を信じ、信仰の餘り自ら毎日慎しむべきことを五箇條に極めたといふことである。而して其の五箇條の書き方が如何にも面白い。即ち左の通りに書いてあつたといふことである。

今日一日の事

- 一、今日一日は三つの御恩を忘れず、不足を申す間敷事。
- 二、今日一日は、嘘言をいふべからず。

今日一日の嗜

三、今日一日は、腹を立つべからず。

四、今日一日は、人の惡きことを言はず、又我が善きことをいはず。

五、今日一日は、我が身の生存を喜んで、家業を勉強致すべし。

右は今日一日の嗜にて候。

初めに「今日一日の事」と題し、後に「右は今日一日の嗜にて候」とある所に、修養上眞の妙味があると思ふ。明日からといふやうな人とは眞に正反對の考である。修養は眞に是れて無ければならぬ。すべて修養的實行としては、

朝顔やその日その日の出來のよさ

といふ句のやうに、唯其の日に注意して、明日といふ考を餘り持たないやうにするのが、實踐の秘訣である。就いては彼の亞米利加のフランクリン氏の自省法。又は支那國雲谷禪師の功過格。並に蓮池大師の自知録の如き、孰れも皆此の今日の注意上最も適切な法であるから、此に之れを擧げて然るべきことのやうに思ふ。されど是れ等の事は後に別項を設けて陳ぶる考である。

八、修養に志ある者は多年一日の如くなれ

如何に肥沃な土地といへども、彼の天空に聳える喬木大樹に多數の歲月を經過して居ないものは無い。必ず幾百年といふ長き月日を経たものである。而も其の幾百年といふ長き間に於いて、ただの一日と雖も、空しく其の日を送つたことは恐らくあるまい。即ち一日といへども自己の發育を休むといふやうなこと無く、眞に多年一日の如く其の發育を休息すること無かりし結果として今や彼れが如く喬木と成つて榮えて居るのであらう。

吾々の身體もまた鳥渡そんなものである。どうしてまあこんな五尺に餘るほどの身體が出来たものであらうと、一つ不審を起して見るに、どんな人といへども、幾十年の其の間、毎日不缺に外部より食物を喫し種々の營養品を吸収し來つた結果であるに相違ない。如何に健康體の父母に依つて、初より健康體に生れついた人といへども、多年間一日の如く、食物より種々の營養品を吸収することを繼續せし者にあらざれば、決して此の身體が出来るものでない。一年や二年で、此の五尺以上もあるやうな體格を拵へるといふことは、唯人力を以て不可能なるのみならず、天力を以つても、神力を以つても、亦た佛力を以つ

ても、到底不可能の業である。修養の多年一日の如く爲さざるを得ざる所以、此に於て悟了すべきである。老子が大器晩成と謂つたのも、亦此の道理から來たのである。

是を以て、前に己に修養上明日といふ考へは禁物なり、修養は必ず今日一日のものなりといふと雖も、修養は今日限りのものにして、明日よりは之れを止めよと謂つたのではない。今日にあつて明日之を爲さんとするの考へを持つ必要あることなしと謂つたのである。吾人は彼の太陽が東天に昇り來る毎に、必ず又新なる今日を迎へるのである。日に日に新にして、又日に新なり大といへる如く、吾人は死に至るまで、無限に新なる今日を迎へるのである。即ち一夜の睡眠を以つて境界線となし、昨日の明日は纏て今日と名の變り來るのが、時間經過の常例である。而して其の新たに迎へ來る今日の中に於いて、ただの一日といへども、此の日ばかりは怠つてもよいといふべき日は無いのである。恰も吾人は終生の間に於て、面を洗ふに及ばぬといふ日もなく、又食を喫するに及ばぬといふ日もないと同様に、修養に怠つてよいといふ日は、ただの一日

修養は一時のうちにあら

もないのである。假令百年の長壽を得るも、其の中に一日もあること無し。眞に多年一日の如く繼續して止むべからざるものが、修養の本義である。

前にも已に謂つた通り、此の修養といふは一の習慣を造るのである。而も善の習慣を造るのであつて、惡の習慣を造るのでない。惡の習慣なれば、何人も容易に出来るものであるが、善の習慣は容易に出来るものでない。喩へば下劑の効能は忽ちにして現はれ来るも、滋養の爲めの薬用は其の効能を見ること容易でない。牛乳が滋養になるとか、スープが補薬になるとか謂つても、二日や三日これを飲んで其の効果を見んとするが如きは到底不可能である。修養は元來永久に繼續すべき事柄にして、一時的のものでない。而も之を繼續するにあらざれば其の効果を見る能はざること、眞に牛乳やスープのやうなものだと謂つてよからう。人間萬事十年とは、吾輩平素の持論である。凡そ人の爲すこととに、十年以上之れを繼續せずして、出来ることは斷じてないと思ふ。凡そ何等の藝能技術といへども、彼れは上手である。どうもむまいといはるゝまでに發達するには、其の人に於て、少なくとも十年以上其の道のための修養を積んで居

人間萬事十年

釋迦孔子も多年一日の如く修養す

るといふことは、別に之を聞かずも明かに分つて居る。此に極端な反對の例を擧ぐれば、彼の強盜、窃盜、掬模、賭博の如き者と雖も、並以上の器になつて、常人の出來ざる所にまで達するには、十年以上の苦辛あるは固より無論のことである。惡事尙ほ以て然り、況や善事をや、善事の必ず多年を要すべきは固より無論のことである。

佛教家の中に天然の彌勒なく自然の釋迦なしといふ諺がある。其の意は彌勒も釋迦も自然に彼の地位に成られたのではない。多年一日の如く修行に怠ることがなかつた結果として、一は大菩薩と成り、一は佛陀と成られたのである。といふことを陳ぶるのであるが、彼の孔子の如き、生れながらにして知れるものゝ如くいふと雖も、『論語』の中には、孔子自ら己れの經歷を語つて、

吾れ十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知る、六十にして耳順ふ、七十にして心の欲する所に従へども矩を踰えず。(和譯)

と曰はれたことがある。即ち十五歳の時から、七十歳の時に至るまで、修養に怠

人の長處
を見て天
才と認め
る勿れ

ることなく之を繼續し來たりとは、孔子の自白である。此に依つて之を觀るに、釋迦孔子の如き大聖人と雖も、多年一日の如く修養を繼續せられし結果として、彼れが如き世界の燈明臺と成られたのである。況や吾人をや、吾人は愈々以て修養の繼續を待たずして勝れた人物たること能はざる所以をよく自覺するがよい。

然るに世人一般の通弊として、他人に、何乎勝れたる長處の存ずるを見るや、必ず率爾に之れを評して、彼れは才子である。或は又彼れは幸運兒であるなど謂はんとする者が、兎角多いやうに思ふ。斯の如きは、恰も多年の苦辛に依つて成れる、人造の建築物を見て、一朝に成れる、自然的屋氣樓と見るに相似たりと謂つてよからう。誠に思はざるも亦た甚しきものにして、妄斷早計の極である。例せば山陽といへば、誰れも才子であつたとの感想を惹起し、彼れは勤勉に依つて成功せし者なりとの考を懷く者は、誠に少ないと思ふ。されど傳に依つて之れを觀るに、此の如きは全く誤謬の感想である。左に少しく其の事實を擧げて見やう。

山陽を
子といふ
者は未だ
山陽を
知らず

頼山陽は、徳川時代に於ける大儒の一人、頼春水の子であつた。彼れは生れて僅に八九歳の頃、早已に國字を以つて成れる古今の軍記ものを讀んで、晝夜懈ることなく、時に寢食を忘るゝこともあつた位のものである。適々眼病に罹り、父春水の讀書を禁ずるに遇ふといへども、尙ほ隠れて之れを讀むことを止め、なんだと書いてある。兒童の時に於ける山陽は、既に此の如き勉強家であつた。又傳に山陽平生耽讀書、勤著述とあつて、彼れは終生著述に勤めた人である。而して彼れが壯年の時の傑作は、『日本外史』^{二卷十}又晩年の大作は、『日本政記』^{十五}である。『日本政記』は實に晩年の作として、記事多く病中に成るといふ。彼れ其病既に革まるに遇ひ、我が死將に逼れりと言ひつゝ、猶ほ眼鏡を着け、手に『政記』を取り、之れを刪補して止めざりき。一日俄に左右を顧りみ、我れ將に假寢せんと云つて筆を擱き、眼鏡は未だ離さずして終に瞑すと書いてある。彼れが少年時代の事を思ひ、又此の最後の傳を見れば、其の中間の行ひは別に記すの必要あるまいと思ふ。要するに彼れ山陽の一生は、勤勉を以つて終ると云つてよい。但し彼れは性來酒を好んだ者である。故に毎日夕刻になれば、必ず門下生と

共に對飲したさうである。されど其の分量に制限あつて、制限以上は一杯と雖も過ぐすことは無かつたと書いてある。而して酒氣の有る間は門生と共に談論し、已に醒むれば即ち書を讀み、五更十二に至らざれば眠らず。朝は又必ず早起し、而も自ら衾を收めて、人を使はず。室内の掃除も亦た自ら之を爲し、寒暑一定して更ること無かつたと書いてある。之れに依つて彼れは常に人に語つて、

山陽は才子なりといふ者は未だ我れを知る者にあらず。
山陽は能く勤めたる者なりといふ者は我れを知る者なり。

と云つたさうである。此に由て之を思ふに彼れは實に能く勤めた者である。抑も彼れ山陽の『日本外史』は實に二十年間の刻苦精勵に依つて成るもの也。彼れ初め之れを脱稿して篋底に藏す。然るに時の徳川幕府の老中たりし白川樂翁公之れを聞いて懇望に堪へず。之れに依つて彼れは左の文を附して送つたのである。而して是れが『外史』の世に流行する端緒であつた。

拮据二十餘年藏之篋笥未嘗示人今乃得閣下之寓目以取信於天下後世眞意外之幸也。襄雖無求於今日而不無求於千百載云云。

山陽の外
史は二十
年にして
成年に成
る

彼れは希望を遠きに置き、不無求千百載といふと雖も彼れが死と同時に此の『日本外史』は滿天下に流行する所となつたのである。即ち徳川の末運より延て明治維新の初めに當る時の讀書家に、先づ『大學』『中庸』『論語』『孟子』並に『十史略』を讀まぬ者は恐くなかつた。有らうが、其れと共に又山陽の『外史』を讀まぬ者もないといふほど盛んに流行したものであつた。従つて明治維新の士氣を鼓舞するに預つて大に力ありしことも亦疑はれぬ事實である。今上陛下は、明治十四年に、忝なくも故山陽の墓前に正四位を贈り給ひし所以亦た實に此に存するのである。

吾輩曾つて廣島市の或る經師屋にて、一雙の屏風を張り替へるとして、之れをめぐつて見たところが、其の下た張りに用ひし紙が皆悉く山陽の手習をなせし反古であつて、而も其の反古は、一の字を習つた紙ばかりであつたといふことを、或る古翁の談話に聞いたことがある。今や山陽の書といへば、物に依りては千圓以上の價を以つて賣買せらるゝといふことであるが、其の原因を問へば、此の習字の結果である。

人間萬事
休息す
歩ば必ず
退れ

彼れを思ひ此れを考ふるに、山陽は唯才子であつたと想ふは、眞に誤謬である。彼れは多年一日の如き修養に依つて、自己の天才を喚び起した人である。獨り山陽のみならず、何人と雖も、一の長處を有し、達人であるとか、又上手であるとかの好評を享くるほどの人は、必ず多年一日の如く修養して、自己の天才を喚び起した人に相違ない。

而も修養は一旦其の天才を喚び起すことに努め、後は之れを廢して可なりといふ譯のものでない。其の人の終生を期して廢することのなきものが眞の修養である。若し夫れ中途にして其の修養を廢すとせんか。此の如き人は、其の日より其の藝術技能などを退歩する人である。と見てよい。翻つて老後に至るも、尙ほ其の道に於いて退歩せぬ人あれば、其の人は常に其の道に懸念して、相變らず其の道の爲めの修養を繼續しつゝある人と見てよい。

見ればただ何の苦もなき水鳥の

足にひまなきわがおもひかな。

といふ歌がある。これは水戸黄門徳川光圀卿の歌と聞いて居るが、實に此の歌

修養は畢
生を期す
へきもの
なるの實
例

の通りである。江河の水面に、鴨などの浮んで居るのを見すれば、木の葉などの浮んでゐるのも殆んど同様にして、何の苦もないやうに見える。されど近寄つてよく之を見れば、少しのひまも油断なく、彼れは我が足を使ひ、其の足の力に依つて浮んで居るのである。人もまた其の如く、外見を以てすれば、何の苦もなく出来ることのやうに見えても、其の自身にあつては、常にひまなく、其の道のために竭くす所あるに相違ない。例へば横綱の常陸山や梅ヶ谷が如何に相撲に強いといふても、一年も二年も相撲を止めて然る後取つて見たらどうであらう。日下部鳴鶴翁は書の先生である。川端玉章翁は畫の名人である。と謂つても、二三年間筆と縁を斷つて後、又筆を執つて見たらどうであらう。如何に健脚な郵便配達夫でも、數日間休息して、然る後又草鞋を附けて見たらどうであらう。孰れも皆之れを休息すれば必ず退歩するに相違ない。人間萬事休息すれば必ず退歩すべき規則を有つて居るといふことを忘れぬやうにせねばならぬ。随つて修養は生命のあらん限り廢すべきものでない。多年一日の如く繼續すべきものであると斷言してよい。

修養上の人

修養上の人

吾輩本年北海道を巡遊し、函館に二日間滞在して、此の修養談を試みたことであつたが、席上、函館中學校教頭、武宮環君あつて、自分が舎監奉職中、今の青年輩の意志を鞏固にするためにとて、毎朝の冷水浴を勸告したことであつた。處が夏の頃は随分これを實行する者を見受けたが、寒中になつて之れを繼續する者は、一人も無かつたと謂つて慷慨して居られた。吾輩此の如き人物は、修養上眞に無資格の人であると思つてよいと思ふ。

近世の大儒重野博士は、三十歳の頃より、毎朝早起、冷水摩擦の爲めに約三十分間を要し、それより約一時間は雨が降つても雪が降つても凡そ一里ほどの道を散歩するとなし、本年八十四歳の老軀に至るまで一日も之れを止められな。又文學博士法學博士男爵加藤弘之君は、自分の書齋の掃除は必ず自分に致さるゝさうである。又日露の大戦争に、計を帷幄の中にめぐらし、我が海軍に大勝利を得せしめたる、前の海軍大臣山本伯爵は、毎朝自分の褥を自分に片付けらるゝといふことを聞た。吾等は此の如き人にして初めて修養上有資格の人であると思ふ。

本年七月三十日、余はいつもより早く自分創立の學校に出掛た。處が途中向ふより來る人の中に、ヤ、と聲を掛けた人があるので、氣付いて見たところ、想はざりき此は先きの宮内大臣正二位伯爵の片書きを有つて居らるゝ土方久元君であつた。いつも二頭馬車で貴族の装を爲し、堂々として出掛らるゝ土方伯爵が、此の日に限り紺緞の單衣に、黒き緞の羽織いと、鹿末な袴を着け、唯ステッキを伴と爲すのみ、一人の従者も見えぬ吾輩心に怪んで其の行き先を尋ねたのである。するとイヤ今日は親の忌日である。依つて染井に親の墓があるから、それに參つて今は歸りじやといふことであつた。いつもですかと推し返して問へば、毎月今日は早起、食前の墓參を常例として居るとのことであつた。吾輩之れを聞いて眞に敬服した。此の如き人にして修養上眞に資格ありと思ふ。依つて此に之れを附記することにしたのである。是等の實例は、孰れも皆、今の青年諸君に對し、誠に生きた教訓である。

すべて、修養は一ヶ月や二ヶ月間、之れを實行しても、其の之れを爲さざる人

百四十歳
の長壽法

如くせねばならぬといふ實例は、衛生に依つて健康體を得る方法に依て考へて見るもよい。雜誌『成功』第拾八卷第貳號に、百四十歳の長壽法と題し、醫學士田村化三郎君の談話が出してあつた、多少參考になると思ふから其れを此に抄出して置く。

(前略)余は此頃數百年間實驗せられて、効果の著しいと稱せられる無病健全法を聞いたが、頗ぶる方法が簡易で、實行し易いから茲に述べることにしやう。或地方の農村に父の百四十幾歳を頭として、その玄孫の五十八歳に至るまで、家内揃つて、無病に何んな特異點があるかと云ふに、同家には代々一個の衛生的家憲があつて、この家憲は如何なる場合にも嚴守すべきものとせられてゐる。然らば其家憲は如何なるものかと云ふに、即ち同家の家族は毎朝、必ず鹽湯を湯呑で一杯位飲むことである。これは一月や二月、三月、四月、五月、六月、七月、八月、九月、十月、十一月、十二月、一年は、頭痛がしたり、或は腹の具合が悪くなる、或は風を引き易かつたりするが、鹽湯を呑んでから、或はそんな病的な現象がなくなり、一切の病氣に對する抵抗力が強く、なる所謂無病健全になるのである。

實驗者の言によれば、朝鹽湯を飲むと、食慾が進んで、消化が盛んになり、忽ち空腹を

宇宙の現象
自然律的

感ずるとの事である。垂死の重病者でも、食鹽水を注射すると、元氣が回復する程であるから、無論鹽湯を飲むことは、醫學上から云つても甚だ善い事だと思ふ。それから此點以外に、尚ほ毎朝、必ず鹽湯を飲むこと、云ふ規則的の克己は、健康を助ける上に於て、甚だ有効である。多くの人は、十日や一月、二月、三月、四月、五月、六月、七月、八月、九月、十月、十一月、十二月、一年は、頭痛がしたり、或は腹の具合が悪くなる、或は風を引き易かつたりするが、鹽湯を呑んでから、或はそんな病的な現象がなくなり、一切の病氣に對する抵抗力が強く、なる所謂無病健全になるのである。

九、修養に志ある者は須らく規律的生活なれ

昔は天が動くのである。地は不動のものであると極つて居たが、近頃の天文家は、説を變へて、地が動くのである。天は常に不動のものであるといふことになり、成つて來たのである。されど天動地靜が眞か。又地動天靜が實か。そんなことは其の道の専門家に任して置くがよい。吾輩素人の得て容易に知るべき限りのもので無い。唯吾輩は吾人の栖める宇宙の自然界が、いかにも規律的なるに驚くから此に其の事を一言謂つて見ようと思ふのである。

先づ天の日月星辰に就いて之れを観るに、太陽は未だ曾て其の出沒の時間

を違へたことがない。又其の出沒の方位を過つたこともない。例へば夏至の六月二十一日になれば、毎年必ず午前四時二十五分に出て、午後七時に没し。冬至の十二月二十一日になれば、毎年必ず午前六時四十七分に出て、午後四時三十二分に没し。而も又春分の三月二十一日と秋分の九月二十三日とは、正東より出て、又正西に没し。此の春分と秋分との間に於て、三月二十一日より六月二十一日までは、漸次に北の方より出て、又北の方に没し。六月二十一日より九月二十三日に至るまでは、漸次に正東の方面に向つて復し來り。九月二十三日以後は、漸次に南の方より出て、十二月二十一日より三月二十一日に至るまでは、又漸次に正東の方面に向つて本位に復し來るが如き。其の規律の嚴格なる未だ曾て之れを違へしことあることなきは、皆人の目撃する所の事實である。

獨り太陽のみならず、月が陰曆の十五夜になれば、日の西山に没する頃に當つて東山の上に出て、又日の東山に昇る頃に當つて西山の邊に没し。三十日及び一日の頃には、殆んど暗黒のものと成つて、而も出沒の時間を太陽と幾んど

同うするが如き。規律の一定して變らざるものもあるも、亦た吾人の目撃する所の事實である。其の他の衆星も亦此の如く規律の嚴格なるものあつて、昨四十年六月に現はれた彗星の如きは八十年目に必ず一回出でて、其の他の年には決して出現することなきものと聞いて居る。要するに日月星辰の運行は眞に規律的である。

天の日月星辰が、斯の如く規律正しくして、之れを違へざるのみならず、地上の草木も亦た其の規律の正しきこと、殆んど天象と相似て居ると謂つてよい。例せば毎年一月になれば、寒風の凜烈たるにも係らず、梅花は必ず清香を放つて自ら綻びんとするあり。福壽草は積雪の中をも厭はず、自ら笑を帯びて開かんとするあり。既にして四月頃にもなれば他の百花亦た爛漫として咲き亂れ、人をして殆んど花に酔はしむるが如きものあるは、年々歳々一定して變つたことがない。吾輩二十有餘年間、此の東京に居て、春花の時節を観るに、年に依り多少の變更なきにあらざるも、花信の一週間以上違つたことは、未だ曾つて之れなしと謂つてよい。實に宇宙の自然界は、皆悉く嚴格なる規律を守つて違は

人の規律
を守らざる
を以て得ざる

ぬものである。

此の如く規律を以つて成り立つ天地の間に生れ、殊に萬物の靈を以つて自任する吾々人類が萬事に就き規律的なることの必要なる所以誠に以て推知すべきに至りてある。近くは吾人身體の上に就いて之れをいふも、規律的な者は健康なることを得、規律的ならざる者は健康を害うを以つて、常例と爲すと謂つてよい。例へば運動は生理上最も必要のものである。されど規律的に、而も其の度合を得ざる運動は却つて害を招く恐れがある。睡眠も生理上頗る有益のものである。されど規律的に、而も其の度合を得ざる過當の睡眠は、唯惰弱に流るゝのみならず、生理上亦以つて有害のものである。飲食の必要は固より無論のことである。されど是れとても規律的に時間及び分量等を過つ時は、身を害すること最も甚しい。獨り常食のみならず、藥品といへども、之を服する分量及び時間等の規律的なるに依つて、其の效能を見ることを得るのである。若し夫れ其の分量及び時間等を守らざるに於ては、藥其の者も却つて毒と成つて身を害することなきにあらざるは、何人と雖も分りきつたことである。果し

精神修養
は規律的
なるべし

て然らば人は規律に依つて生き、不規律に依つて死するものであると斷言してよいてはあるまいか。

肉體の生存が既に此の如く規律に依らざるを得ざるものなるが如く、精神の我れも亦た規律に依らざるを得ぬものである。語を換へて之れをいはば、精神的修養法は、規律に依つて、初めて其の効果を見るものである。譬へば彼の蛇を見るに、走り行く時もどねりくくと曲りつゝ行くものである。止まつて居る時も亦た必ず曲つて居るものである。吾輩は未だ曾つてまつずどになつて居る蛇を見たことが無い。しかしながら斯くの如く曲るを以て殆んど自己の性質として居る蛇も、之れを竹の筒の中に入れて置く時は必ずまつずどになつて居るに相違ない。今吾人の心も亦た兎角曲り易き性質を有つて居るといへばならぬ。此の至つて曲り易き吾人の心をして、成るべくまつずどのものでなしめんとするのが、修養の本義である。而して之れをまつずどのものでなしむるの方法たるや他なし。適當の規律を設け、吾人の心をして其の規律の筒の中に入れて置く方法を講ずるに如かずとは、古賢墨鸞の教訓である。

人の必要ならぬ
馬に乗るに
必要ならぬ
が如し

人にして若し規律の必要といふことが無いならば、彼の儒教にあつて禮義三百威儀三千といふことの有らう筈はない。又佛教にあつても、五戒、八戒、十戒、二百五十戒、或は五百戒、亦は八萬の威儀などいふことの有らう筈はない。獨り儒教、佛教のみならず、彼の基督教にあつても、初め猶太教の十戒を本となし、終に幾百の戒目を成立するに至つたといふことである。此の如く政治家は政治家として法律を講じ、道徳家は道徳家として禮義を講じ、宗教家は宗教家として戒律を講ずるものは、要するに人にして規律の必要なる、恰も馬を御するに轡の必要なるに等しきものであるが故である。彼の『禮記』の中を見るに、

道徳仁義禮に非ざれば成らず。教訓して俗を正すも、禮に非ざれば備らず。と説いてある。又支那梁朝時代に僧祐となんいへる、芽出度高僧あり。此の人は自著の『高僧傳』の中に、道に入れば即ち戒律を以つて本と爲す。俗に居れば則ち禮義を以つて先と爲す。と書いて置いたが、孰れも道徳の修養は規律的制裁に依らざるを得ずといふにありと謂つてよい。孔子の禮義も、釋迦の戒律も、其の國を殊にすると、また其の教を別にするとに由り、彼此の間に其の不同あるは

海軍兵學校
參觀當時
の感想

固より無論なりと雖も、道徳の修養は必ず規律的生活を要すといふ趣意に出でしものなることは、彼此全く一致である。

吾輩去ぬる四十二年十一月、廣島市に趣き、序に呉市に行き、又同軍港の中なる江田島の海軍兵學校を參觀して、大いに感心したことがある。校舎などの建築や、又規模の廣大なることや、大砲の澤山あることや、或は軍艦及び水雷艇などの説明を聞いても、随分感心せぬてなかつた。しかし、それよりも吾輩の感心したのは、規律の嚴格にして、而もその嚴格なる規律のよく行はれ居ることに驚いたのである。吾輩を案内して呉れた人は、海軍大佐伊藤君、並に外一名の將校であつた。吾輩は此の人の案内に依り、校の内外を殘る限なく觀せて貰つた。其中二階なる生徒の寢室に上つた。其の長さは凡そ拾四五間もあつたやうに思ふ。さて其の室内に、寢臺が規律正しく二列に並んで居た。さうして寢臺の上なる夜具、即ち毛布のたゝみ方、並に枕の置き様などを見るに、如何にも規則正しく、數十種の寢具の片付方に、一寸の違も無いと謂つてよいほど奇麗に揃へてあつた。

吾輩之れを觀て、感心の餘り、伊藤大佐に向つて、此を賞讃した。すると大佐の言へるやう、これが規律であります。本校の特色として、自負する所は實に此の規律であります。學校の設備などの點に就いていへば、英國などの兵學校には到底及ぶものではありませぬ。しかし校内の規律の嚴にして、而もその規律のよく行はれて居ることは、歐米各國にも未だ其の比類を見ざる所でありまして、外國人も參觀すれば必ず之を感心して歸ります。此の規律が過る三十八年、日本海に於ける大戦に當つて、皇國の名譽を全世界に博した。一大原因であります。規律は唯戰時中ばかりのものではありません。平常が大事であります。平常といへども、唯軍事の演習にのみ規律を要するばかりではありません。起臥進退等、凡べての働作が規律的で無くば、まさかの時の役に立つものではありませぬ。故に本校は規律で持つて居ります。寢具の片付方、かく整頓して居るのも、全く規律のよく行はれ居る證據であります。との説明であつた。

吾輩此の説明を聞いて、規律の人に於ける効能の偉大であるといふことに就き、無限の感想を惹起した。ことであつた。獨り軍人のみならず、凡べて人たるもの、生活は、規律的でなければならぬといふ考を惹起した。ことであつた。

十、修養に志ある者は宜しく先輩の行跡に倣へ

吾輩は修養のため規律的生活を唱導すと雖も、必しも印度的佛教の戒律や、支那的儒教の禮義三百、威儀三千を、現時の日本人民に運用せよといふのではない。現時の日本人の規律的生活には、もつと適切なる好模範たるべきものがない。無いでもあるまい。依つてこゝに之れを紹介して置く考へてある。

昔し孔子の弟子に曾子といふ人があつた。篤行を以つて名の聞えた人である。彼の『孝經』二卷は實に孔子がこの曾子のために説いたものになつて居る。さうして『論語』の中に曾子曰くとして、

吾れ日に三たび吾身を省る。人の爲めに謀つて忠ならざる乎。朋友と交はりて信ならざる乎。傳へて習はざる乎。

といふ語が出てある。是れに由つて之れを觀るに、曾子といふ人は、恰も吾人が日に三度食卓に就く如く、毎日三度反省する所あつたものと見える。而も吾人が一度に必ず三椀を食する如く、三事に就いて反省するを以て毎日の規則と

して居たものと見える。其の第一が人の爲に謀つて忠ならざる乎といふのであるが。これは何人に係はらず、自己の近親の者より延いて社會公衆の人にまで。何事に依らず、すべて親切に誠實を以てせんといふ心掛であつたと見える。第二は「朋友と交はつて信ならざる乎」といふのであるが。これは朋友間の交際の信義を缺かぬやうにしやうといふ心掛であつたと見える。第三は「傳へて習はざる乎」といふのである。これは師の孔子よりして折角道を傳へながら之れを其の儘にして、實地に習ひ修めず、棄て、置くやうなことはない乎との注意であつたと見える。斯の如きは實に曾子其の人の規律的生活といふものである。

また北米合衆國にフランクリンといふ人があつた。此の人は北米合衆國あらん限りの恩人である。なぜかといふに、北米合衆國が初め英吉利の屬國であつたのを、終に獨立國たらしめ、而も今日の如く世界の優勝國たらしめたるは、彼のワシントンの力なりといふけれども、其のワシントンの片腕となつた人は、此のフランクリン氏である。故にフランクリン氏は北米合衆國のあらん限

米國フ
ランクリ
ンの規律
的生活的

り、彼の國民として永久忘るべからざる恩人である。然のみならず、彼れは世界文明國の恩人である。なぜかといふに、彼れは現今物質的文明の要素たる電氣の發明者であるからのことである。

斯の如き偉人フランクリンは、西曆一千七百六十六年、北米合衆國のボストン市の脂蠟燭屋なる赤貧の家に生れ、而も兄弟多き其の中の一番末子であつた。故に十分の教育を受くる能はざりしは固より無論のことである。彼れは初め新聞屋に奉公し、印刷業に従事した人である。印刷所にあつて、活字ひろいでもして居たと見える。此の如き不運の身が、如何にして後日彼れが如き大人物たることを得たのであらう。固より是れには種々の原因もあるに相違ない。然れども彼れが二十七歳の時より、日常の制度を規定し、自ら之れに依つて修養する所ありし結果なることは、彼れが自傳に記す所なれば、何人も疑ふべからざる事實である。即ち彼れは自己の日常制度を十三科となし、別に一の表を造り、毎宵就褥前に當り、其の日の行實を省み、失行ある時は其の條項の處に黒點を附し、失行なかりし時は、白色にして置くといふ方法を取り、多年一日の如く之れ

フラン
クリン
氏の
小傳

を實行し、以つて自らを修養した人である。謂ふ所の十三科、並に表の造り方は、左の通りである。

- | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 12. | 11. | 10. | 9. | 8. | 7. | 6. | 5. | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 貞 | 沈 | 清 | 中 | 正 | 誠 | 勤 | 經 | 決 | 秩 | 沈 | 攝 |
| 操 | 着 | 潔 | 庸 | 義 | 實 | 勉 | 濟 | 心 | 序 | 黙 | 生 |
| ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... | ... |
1. 攝生 だるくなるまで飲むな。
 2. 沈黙 他人の口はさげよ。自分に利益なることの外は話するな。
 3. 秩序 仕事を置くにも、その順序を立てて置く。物を置くときも、その順序に従う。決心せよ。
 4. 決心 決心せよ。必ずの間違なく、屹やに遂げよ。
 5. 經濟 一己物も無駄にせず、人のためを止めよ。の外は、餘計な費を省け。
 6. 勤勉 時間を使ひ、強し、一切無益な仕事をなすな。
 7. 誠實 害をなす時、偽を省け。何事も無邪氣に考へよ。
 8. 正義 害をなす事、忘れた。又己の傷けるなど禁ぜよ。
 9. 中庸 何事も、極端なことをさげよ。いたまらへよ。
 10. 清潔 身が並つて、衣服は住居など、清潔にせよ。
 11. 沈着 世にありのふれたる出来事、及ぶつて、うらぬ事、亦是避
 12. 貞操 ...

13. 謙

スイエス及びソクラテスなどに則を求めよ。

此のフランクリンと殆んど相似たる自制的修養法を實行した者は、支那國、明末の袁了凡である。と申してよからう。袁了凡は豊臣秀吉が三韓征伐を爲す時に當り、明朝より四萬の援軍を遣はしたことがある。彼れは其の時の監軍の今

日常制度表							項目
日	月	火	水	木	金	土	
●		●					攝生
●			●		●		沈黙
	●				●	●	秩序
							決心
		●		●		●	經濟
				●			勤勉
		●					誠實
●				●		●	正義
		●					中庸
●				●		●	清潔
							沈着
				●			貞操
							謙遜

謀であつたといふことである。而も此の人は彼の『歴史綱鑑』の評を造つた人であるが、此の人初めは命數説といふのを信じて居た。凡そ人事萬端、どんなことでも、その人の生るゝ時、已に天命に依つて一定するものにして、出生以後、いかにするも之れを動かすことの出来ぬものであるといふのが命數説である。而して衰了凡は之れを確信して居た人である。然るに彼れは故あつて南雍の棲霞寺といふに到り、圖らずも雲谷禪師に面會し、數日對話の結果、終に命數説の妄なるを自覺すると共に、雲谷禪師より『功過格』なるものを授かり、爾來之れを實行した人である。

功過格

功過格とは、或る善事の功は幾許に當り、又或る惡事の過は幾許に相當するものなりと、日常の善事惡事に就き、豫じめ、其の價格を定めて置いて、而して一定の表の下に毎日の功過を記し、月末に至れば功過の多寡を計算して見る方法である。而して此の功過格なるものは、本と道教家の手に成れる『太上感應篇』より出たもので、功過格の科目など必ずしも一定して居ない。即ち功過格の極め方が一様で無い。今こゝに十科としてあるものを擧げて置かう。

(雲谷禪師所傳の功過格は繁なれば之れを略す)

- 第一、孝順格。父母に對する行。
- 第二、和睦格。妻妾に對する行。
- 第三、慈教格。子弟に對する行。
- 第四、寬下格。僕吏に對する行。
- 第五、勸化格。公衆に對する勸善懲惡。
- 第六、救濟格。窮民に對する仁慈博愛。
- 第七、交財格。金錢の貸借に關する行。
- 第八、奢儉格。節儉を守る行。
- 九、性行格。廉恥を守る行。
- 第十、敬神格。祖先及び神明に對する行。

明末には、佛教家の中にも、此の衰了凡と相似て此の功過格を歡び、自ら之れを奉じ行ふのみならず、又努めて世に之れを弘めた人がある。即ち前の雲谷禪師並に蓮池大師株宏の如きは、其の人である。蓮池大師は、佛教界に於ける明末の

一明星であつた。此の人は學識も優れて居たが、學問の方よりも寧ろ徳行を以つて一時を風靡した人である。而して此の蓮池大師は『功過格』を改め『自知録』と題し、古來の功過格に對し大いに其の面目を改めた人である。事繁に渉るゆゑ、今之を記すことを見合す考であるが、『自知録』の序文に依れば、彼れ蓮池大師は、出家以前に於て已に此の『功過格』を見て大いに悦び、之れを上梓して人に施したと謂つてある。之れを『自知録』と改題し、其の面目を改むることにしたのは、餘程後のことと見える。

雲谷禪師の『功過格』並に蓮池大師の『自知録』は、拙者『自省録』(明治三十九年四月大日本圖書株式會社出版)の中に和譯して置いたから、今之を略して擧げぬのである。袁了凡のことは『陰陽錄』を見て盡くすがよい。『陰陽錄』と『自知録』とは、元祿年中に、獅子谷の忍叡上人が淨財を集めて鏤刻せられしものがある。其の他にまた之を和譯せしもの數部ある。吾輩の手本にも三部ほど聚つて居る。されど今此に載することは冗長を恐れて止めることにした。志あるものは、本書若くは『自省録』を見られよ。

最後に會つて大聖釋迦牟尼世尊が、時の尸伽羅越善星に對したまひての御教訓を擧げて置かうと思ふ。往昔釋尊在世の時に一の富豪家あり、主人の名を

規律的
生活に
關する
教訓

尸伽羅越即ち善星といつたといふことである。此の人は毎朝早起、泉水の邊に到りて洗面し、洗面を了れば、必ず東西南北及び上下の六方を禮拜するのを以て、日常の規則と爲して居たのである。乃て或る時釋尊行乞の序にその人の宅に臨まれ、尋ねて申さるゝやう。尸伽羅越よ、汝は毎朝早起、洗面後に至り必ず六方を禮拜するさうであるが、それは如何なるものを拜むのであるか。又何等の願事あつて拜むのであるか。相手は何者で願ひは何事ぞといふやうに、事を分けての御尋ねであつたと見える。

時に尸伽羅越は之に對へて、別に私の心に相手として居る御方はありませぬ。又別に願事といふて何にもありません。唯私の父親が終生此の如く六方を拜みまして、而も最後に至り汝もまた斯くせよと命じました。そこで私は唯父親の遺命を奉じて此の如く今日まで致して居りまするので、此の外に何等の意味もありませぬと謂つたと見える。

釋尊は之を聽き給ひ、父親の遺命を奉じ今日まで此の如く之れを實行して止められぬとは、いかにも奇特なことである。しかし汝の父親は唯形式の禮拜

を教へて、未だ精神の拜み方を誨へなだったのであらう。依つて我は是より精神の拜みやうを誨ふべしとて、懇に指導せられたことがある。此の時の指導即ち教訓を支那譯として傳へたのが『六方禮經』である。文長くして其の全文は到底此に擧げ盡くすべき限りのものでない。依つて今は唯其の大要のみを擧げて置かうと思ふ。

東方禮拜の心得

釋尊尸伽羅越に告げて言はく。汝先づ東方に向つて禮拜する時は此の如く思へ。己れ今日一日は親子の道を過つべからずと分けて之をいへば子としては親に對する所の道を過らざるやうの誓ひを爲せ。又親としては子に對する道を過らざるやうの誓ひを爲せとの教訓である。此中子の親に對する心得につき五箇條、又親の子に對する心得につき五箇條を開いてある。

南方禮拜の心得

東方の禮拜了つて南方を拜む時は又此の如く思へ。己れ今日一日は師弟の道を過つべからずと分けて之をいへば弟子として其の師に對する所の道を過らざるやうの誓ひを爲せ。又師としては其の弟子に對する所の道を過らざるやうの誓ひを爲せとの教訓である。此中また師の弟子に對する心得につき

西方禮拜の心得

五箇條と、又弟子の師に對する心得につき五箇條とが分けてある。
南方の禮拜了つて西方に向つて拜む時は、又此の如く思へ。己れ今日一日は夫婦の道を過つことなかるべしと分けて之をいへば妻として其の夫に對する所の道を過らざるやうの誓ひを爲せ。又夫としては其の妻に對する所の道を過らざるやうの誓ひを爲せとの教訓である。此中また妻の夫に對する心得に就き五箇條と、又夫の妻に對する心得に就き五箇條とが分けてある。

北方禮拜の心得

西方の禮拜了つて北方に向つて拜む時は、また此の如く思へ。己れ今日一日は朋友に對する道を過つことなかるべしと、即ち(一)朋友に惡意あるを見れば之を諫むべし。(二)事小なりと雖も急あれば必ず奔り救ふべし。(三)友人の秘密は他に之を説かざるべし。(四)常に敬愛すべし。(五)好む所の者は必ず分與すべしの五項に分けて説いてある。

上方禮拜の心得

北方の禮拜了つて上方即ち天に向つて拜む時は、又此の如く思へ。己れ今日一日は宗教の道に乘くべからずと分けて之をいへば信徒としては僧侶に對する所の道を過らざるやうの誓ひを爲すべし。又僧侶としては信徒に對する

所の道を過らざるやうの誓ひを爲すべしとの教訓である。此中また雙方に各々五箇條を分けて説いてある。

上方の禮拜了つて下方即ち地に向つて拜む時は又此の如く思へ。己れ今日一日は主従の道を過まるべからずと分けて之をいへば、己れ主人としては従者を使役するにつき非道の虐待あるべからず。又従者は主人に對し不忠の事あるべからずとの教訓である。此中また主人に對する五箇條と、従者に對する五箇條とを分けて説いてある。

佛在世の時の尸伽羅越は、釋尊の如き懇なる教訓を受けて、爾來之れを實行したと見える。即ち毎朝六方に向ひ、形式上の禮拜を爲すと共に、又精神上の禮拜を爲し、以て其の日を謹慎したのであるが、今日の吾人も亦之れに倣つて、精神上の禮拜を爲し、自ら誠むるは、修養上最も必要のことと信じ、此に之を紹介したのである。

この『六方禮經』に四譯あり。(一)中阿含經第三十二卷の中に『善生經』と題し編入するもの是なり。(二)長阿含經第十一卷に同じく『善生經』と題して編入するもの是なり。(三)別

に『佛說善生子經』と題し縮刷藏經及秩第八の中に編入するもの是なり。(四)佛說尸迦羅越六方禮經』と題し縮刷藏經及秩第十の中に編入するもの是なり。

十一、修養に志ある者は飲食物の注意に怠る勿れ

多數の人は、飲食物の注意といへば、唯衛生上に於てのみ必要のことと考へ、修養上何等の關係もなきが如く想ふて居らるゝやうに見える。されど斯の如きは考への未だ足らざるが致す所である。即ち物質物肉身と精神的心象作用と二者の關係の至つて親密なる所以を知らざるが致す所である。そも身と心との關係の親密なること、恰も鐘と音との關係の如くである。凡そ鐘の質に依つて發する所の音を殊にするが如く、肉身の如何に依つて精神状態に必ず多少の影響あることを知る者なれば、精神的修養の第一歩は飲食物の注意にありといふことに氣の附かぬ筈はない。ナゼかといふに、心の依て發する所の身體は、食物の供給を待つて出来るものなるが故である。

分り易く之れをいふと、食膳の上に並んである時は、芋である、午勞である、大根である、人參である、或は又鯛である、鱈である、牛肉である、馬肉である、鰻鮓て

ある、蕎麥であるなど謂はれしものが一度人の口中に入つて、腹部の消化器にかゝるや、忽にして其の形を變ずると共に、又其の名を替へて、今度は人の肉である、人の血である、人の骨である、人の皮膚である、人の髪の毛であると、謂はるゝやうになつて來るのである。今までは豚の體であつたものが、忽に人の體となつて來るのである。而して此の體と心との關係が、恰も鐘と音との關係の如く、親密なものであるとして見れば、精神の修養上、まづ此の體を造る、飲食物の注意に怠らぬやうにせねばならぬといふことは、洵に見易き道理ではあるまいか。眞に見易き必然の道理である。故に精神修養に意を用ふることの深き佛教はこの飲食物の注意洵に至れり盡くせりである。しかし要を取つて之をいはば、今の小學校にて兒童に教示するが如く、釋尊の教訓も亦た之と相似て、飲食物に就いては、其の分量と、其の時間と、其の品質との注意が、最も重なる點であると言つてよい。

飲食物の分量の注意

或る御經の中には、食は三分の二を食して、其の一分を餘すべしと教へてある。佛說十二 或は又諸の飲食物は服藥の如くせよ、好惡に依て之を増減する勿

れと誡めてある。佛說遺 是等は釋尊が吾人の食物に於ける、分量の注意であるといはねばならぬ。誠に母が兒童に謂つて聽かせるやうな教訓である。凡そ過食は衛生上有害なるのみならず、業務上の有害亦た最も甚だしいは事實である。人過食すれば、身も重く、心も重く、腦の作用も亦た殆んど麻痺したるが如き状態に陥るものである。故に身心全體の活動を妨げ來るものは、實に過食である。故に三分の二を食して、其の一分を餘せとは、洵によき教訓である。

然るに動もすると、食は十分に喰ふべし、之を控へ目にするは不可なりといふものなきにしもあらず。余を以つて之れを思ふに、其は理窟より來たものにして實際でない。理窟上、腹部にて消化し得る丈のものは、十分之れを食して可なるは、固より無論のことである。されど人は食慾の切なる餘り、腹部の消化力よりも、餘計に喫することが有つてならぬものである。食卓に向つた其の時は、理窟の方よりも、慾情の方が勝つて居る。例へば、もう止めやうかい、もう少し食べやうかの問題を決する場合に、吾人は腹部に向つて之れを相談すればよいのに、兎角吾人は腹部に向つて之れを尋ねず、舌に向つて之れを尋ねることが多

い。若し腹部に向つて之を尋ねれば、もう十分であるといふかも知れぬのに、い
つも舌に向つて之を尋ねるものゆゑ、味に飽くことなき舌は、必ずもう少しと
出掛るに相違ない故に、食する時に當つて已に十分と思へば、食後に至つて過
食の感じあるは必然である、と謂つてよい。此に依て之を觀るに、釋尊の御教訓
は實際の方より來て居ると謂はねばならぬ。

飲食物の
時間の注

飲食は其の分量に對する注意を要すると共に、また其の時間を極めること
が最も必要である。飲食の時間を極めることなく、いつても極まりなく、食慾に
動かされて、之れを飲み之れを食ふといふことは、恰も豚や犬の常に飲食を貪
りつゝあるに等しき状態ではあるまいか。凡そ動物の多數は飲食の時間が極
つて居ないやうである。されど人たるものは必ず、飲食の時間を極めねばなら
ぬ。間食の如きは眞に慎しむべきである。佛教の律の法則ていはゞ、正午十二時
を過ぐれば、固結物を食することを許さぬことになつて居る。佛事にあつて正
午の食事を御齋正時と稱し、午後の食を御非時と稱するものは、此の律の法則
より來たものである。而して律に此の如き法則の設けあるは、其の本と人の飲

食は時間を一定すべき必要なる所より來たものに相違ない。縦ひ分量に注意
することあるも、前食の未だ消化せざるに後食を送るなど、衛生上にあつても
亦大いに不可なることは無論である。

衛生上の不可は、應て修養上の妨げてある。凡べての業務の進歩は、其の人の
健康に依るが如く、修養も亦健康に依らざれば、之を進ませることが出來ぬ。隨
つて飲食の時間の紊りがはしくすべからざるものなること、よく思ひ知るべ
きてある。然のみならず、食時の不規律なるは、其の家若しくは其の人の生活上
の不秩序より來るものなれば、何人も之を輕んずべからず、大に注意すべき要
件である。

飲食物の
選擇

しかし吾輩今此に於て、分量のことや時間のことを喋々繰返すよりも、寧ろ
品質の注意即ち飲食物其の者を撰擇すべき必要あることを一言したので
ある。先づ佛教に就いて之を觀るに、律門の上にあつては、明かに酒と肉と五辛
大蒜にんにく葱にら葱らつき葱やう葱類とを禁じてある。彼の基督教にあつては、酒を
禁ずと雖も、肉並に五辛を制することはない。孔子も酒は之を禁ぜざるも、之を

飲むに就いての注意をして置かれた。但し肉のことは何んとも謂つてない。孟子が君子は庖厨を遠ざくと謂つた位のことには過ぎない。獨り釋尊は、酒に限らず、肉や五辛の類まで、之を喫するに就いての注意周到である。但し釋尊の教は恰も醫師が患者の攝生法を説くに、其の病に依つて其の説をかへることあるが如く、一定せぬことが多い。即ち一方に酒肉の類を嚴禁してあるかと思へば、又之を許るしてあることも珍らしくない。されど孰れかといへば、釋尊は寧ろ之を制したまへりと謂はねばならぬ。但し釋尊の之を制したまへる主意は精神の修養上その必要あるが故である。

されど吾輩は今敢て印度の古風を學ばんとするのでない。隨方毘尼と共に、隨時毘尼、隨處毘尼、隨人毘尼といふことは必ず之あるべきこと、信じて居る。故に假令佛教徒といへども、必ずしも佛制の戒律の通りにせねばならぬとは思はぬのである。しかしながら、其の人に依り眞個修養に志ある者は、禁酒のみならず、又禁肉の必要あることを信じて疑はぬのである。されどまた一概に之を謂ふべきものでないといふこともよく承知して居る。依て左に之を辨別し

肉食の可
否は其人
に依て一
定せず

て置かう。

- 一、其の人の生理的體格の如何に依て之を禁ずべき必要ある者と、又之を禁ずべき必要な者との二類あり。
- 二、其の人の心理的氣質の如何に依て之を禁ずべき必要ある者と、又之を禁ずべき必要な者との二類あり。
- 三、其の人の本職的業務の如何に依て之を禁ずべき必要ある者と、又之を禁ずべき必要な者との二類あり。

まづ生理上之を考ふるに、貧血性にして脂肪少なく、身體の瘦せ勝ちの人などは、決して肉食すべき必要はないのと思ふ。又心理上之を考ふるに、溫和的性格の人は、肉食してもよからうが、性急なる者、殘忍なる者、短慮なる者、過激なる者、猛烈過ぎる傾きある者、此の如き人にあつて肉食の不可なるは、固より無論である。更に職務上之を考ふるに、日夜劇務に従事せざるを得ざる人、又彼の軍人の如き、或は肉食の必要もあらう。されど敢て劇務に従事するにあらず、閑雅其の日を

肉食の動物は温和性を缺く

送り、書畫、骨董、盆栽などを友とするにあらざれば、或は讀書、詩歌、音曲などを事となす人にあつては、さほど肉食の必要あるまいと思ふ。況や宗教家の如き人に於てをやである。

暫く動物界に就いて其の例を求むるに、獅子の如き、虎の如き、豹の如き、熊の如き、狼の如き、すべて猛獸に屬するものは皆肉食である。又鷲の如き、鷹の如き、鳶の如き、すべて猛禽の中に屬するものも、亦肉食である。翻つて彼の羊の如き、鹿の如き、牛の如き、馬の如き、兎の如き、又象の如き、駱駝の如き、温和的獸類は、皆草を以て食となし、肉を以て食としないものである。此に依つて之を觀るに、人は肉食と菜食と兩方を用ふと雖も、其の人の食物が、其の人の性格に多少の影響が無いといふことは、斷じていはれまい。

菜食の者がは強い耐力が

又去ぬる明治三十七年、日露戦争の起つた當時、獨逸の大醫ベルツは、後日の戰勝を卜し、今度は日本が勝つてあらう、といふのは外でない、凡そ菜食の者は耐忍力が強い、而も精力を長く續けることが出来る。之に反し肉食の者は、強いやうても耐忍力が乏しい、而も精力を長く續けることが出来ぬ、弱ることが早

肉食の關係に關する惡い實験ある談

い。而して露軍は肉食の者が多い、日軍は菜食の者が多い、之れに依つて今度の戰は日本の勝利に歸するであらうと謂つたことが、時の新聞に出たことを薄々覺えて居る。此に依つて之れを觀るに、軍人と雖も必ず酒を呑み、肉を喰はねばならぬと極つたものでも無いやうに思はれる。

北海道北見國網走といへば、何人も彼の地は日本唯一の惡漢を蒐集し、之れを禁固する所の監獄所在地なる、聯想心が起るであらう。而して此の處には寺永慈惠院といふものが出來てある。これは寺永法專君の感化事業に於ける熱誠より成れるものであつて、明治二十九年の創立である。同氏が創立以後、茲に十有五年間、屈せず撓まず、夫妻共に此の慈惠院の感化事業に全力を注ぎし結果として、今や大いに其の成績の見るべきものあり、隨つて各方面の同情奮ならぬまでに進んで居る。彼の地方に漫遊せし人は、皆其の事實を見聞して來るに相違ない。吾輩は昨年五月、北海道札幌に於て此の寺永君に面會し、種々感化事業に關することを尋ね、よく之を聞いて見たことであつたが、其の時、寺永君の説に、多年の經驗上、惡漢を御するには、成るべく勞働させると、肉食を節する

と○の○二○つ○が○大○事○で○あ○る○酒○は○も○と○よ○り○で○あ○る○が○唯○酒○の○み○な○ら○ず○肉○を○成○る○べ○く○止○め○さ○す○こ○と○に○せ○ん○と○情○慾○を○制○す○る○こ○と○が○六○ヶ○敷○い○之○が○本○と○な○り○て○又○種○々○の○惡○事○を○再○現○す○る○や○う○に○な○る○そ○こ○で○勞○働○と○共○に○酒○肉○を○出○來○得○る○限○り○節○減○す○る○の○が○根○本○的○の○必○要○で○あ○る○と○の○實○歴○談○を○致○さ○れ○た○こ○と○で○あ○つ○た○が○實○に○さ○う○で○あ○る○此○の○寺○永○君○の○實○験○談○は○吾○輩○豫○て○の○考○と○符○合○し○て○誠○に○愉○快○で○あ○つ○た○も○と○釋○尊○が○弟○子○の○酒○肉○辛○を○禁○ぜ○ら○れ○し○も○其○の○趣○旨○は○全○く○此○に○存○す○る○の○で○あ○る○然○る○に○今○や○佛○教○徒○の○中○に○酒○肉○を○禁○ず○る○者○は○洵○に○稀○れ○に○し○て○歐○米○人○の○中○に○却○つ○て○菜○食○家○の○漸○次○増○加○せ○ん○と○す○る○傾○向○あ○る○は○真○に○奇○怪○な○現○象○で○は○あ○る○ま○い○か○吾○等○は○佛○教○家○非○佛○教○家○の○別○な○く○其○の○人○に○依○つ○て○修○養○上○假○令○之○を○禁○ず○る○ま○で○に○至○ら○ざ○る○も○之○を○節○し○て○可○な○り○と○謂○ひ○たい○人○は○之○を○禁○ず○る○こ○と○の○頗○る○困○難○な○る○が○如○く○想○は○る○と○あ○ら○う○吾○輩○も○嘗○て○さ○う○想○ふ○た○然○る○に○吾○輩○去○る○明○治○四○十○一○年○九○月○一○日○以○後○聊○か○感○ず○る○所○あ○つ○て○殆○ん○ど○禁○肉○同○様○の○身○と○な○つ○て○居○る○旅○行○さ○さ○若○し○く○は○交○際○上○必○要○の○會○席○を○除○い○て○は○鶏○卵○の○外○他○の○肉○類○は○一○切○之○を○用○ひ○ぬ○こ○と○に○し○て○居○る○が○今○や○菜○食○の○方○に○言○ふ○べ○か○ら○ざ○る○味○を○生○じ

來り却つて肉食するのが苦痛である。肉食は第一に臭くして而も穢きたないやうな氣がしてならぬ。又吾輩の如き性急にして何事に依らず短處多き者のためには、多少其の効なきにしもあらざるべしと思ふのであるが、之を要するに、動物の獸慾を制し、又猛烈的過激性を根本的に醫せんとする修養の第一歩は、酒肉辛の制限にあるや疑ふべからざる眞事實である。

以上多數の人の同意を得ることの到底不可能なるを承知しつつ、吾輩敢て自己の所見を告白したのであるが、尙ほ讀者の誤謬なきを保せざれば、念のため左に之れを約言して置く必要ありと想ふ。即ち吾輩の論法は左の通である。

- 一、身心の關係は至つて親密なるもの也。
- 二、故に心の改善を要するものは先づ其身より改めざるべからず。
- 三、其身を改めんと欲するものは宜しく飲食物に注意すべし。

十二、修養に志ある者は必ず眞正の宗教に依れ

上來修養の方法に就き、くどきをも厭はず、説き去り説き來つて、今や讀者の倦厭を買はんとする場合になつて來たてあらうと思ふ。依つて尙ほ陳述すべ

修養上宗教の必要なる所以の綱目

きこと多々之れなきにあらざるも、此にて其の結末を取らんとするのである。しかし今や將に前述の結末を取らんとするに際し、凡そ修養に志ある者は、何人も又宗教に依るべき必要ある所以を少しく陳べて置きたい。

吾輩先きに已に、修養は宗教と相離るべからざるものであるといふことを陳べて置いた。而も修養の目的は、教育の立場より之を考ふると倫理の立場より之を考ふると、又宗教の立場より之を考ふると、各自その目的を殊にするものなるが如く見ゆれども、深く之を察するに、其の間に又頗る密接の關係ありて、教育も倫理も其の目的は終に宗教の目的に歸着せざるを得ざる所以の存することをも辯じて置いた。即ち各修養は宗教の門に入らざれば、最後の目的地に到達すといはれぬ理由の存することを陳べて置いた。故に修養上宗教の必要なる所以は、事新らしく語るべき必要は無いと思ふされど、吾輩の老婆心を以て、試に左の三項を分けて少しく此に陳べようと思ふのである。

- 一、凡そ人は外形的修養法の外に、内觀的修養法を要す。
- 二、内觀的修養法として現在の運命を知ると共に、又來世の安慰を要す。

- 三、現在の運命を知り、又來世の安慰を得んとするには、必ず宗教的信仰を要す。

前述の十一條は孰れも皆外形的である。即ち外形よりして修養の方法を講じたのである。此の如く外形よりして種々修養の方法を講じ、之を實行するのは固より必要のことに相違ない。彼の釋尊が弟子の戒律を嚴密に規定せられしも、其の意を察するに、外形的修養の必要より來たものであらう。吾輩も亦た其の必要を信じ、上來項を分つて外形的修養法を講じたのである。然れども若し外形的修養法に限り、内觀的修養法に依らざる者あれば、恰も病を治するに外より之を治することのみを考へ、内より病の根柢を醫することに注意せざるに等しきものなりと謂つてよい。そこで病は其の根柢を醫するの必要あるが如く、修養も精神の根柢より之を醫して、善良のものたらしむることが最も必要である。而して今謂ふ所の内觀的修養法は、實に精神の根柢より之を醫するの良法である。しかし吾人の精神上に、之を醫すべきもの頗る多かるべし。謂ふ所の内觀的修養法は、重もにどんな所を醫するのであらう。此の疑問を解決

内觀的修養の必要なる所以

運命を知る
必要なる
所以

運命の存
在する事
實

せんとするものは即ち第二項である。

吾人に内觀的修養を要するもの頗る多い。凡そ反省といひ、克己といひ、謹慎といふが如きも、皆内觀的修養を要すといはねばならぬ。先きに或は惡魔と戰へといひ、或は順境に注意せよといふが如きも、又内觀の力を假らざるを得ぬのである。しかしそれよりも内觀的修養の力を要するものは、自己の運命に對する精神上の處置と、今一は死後の安慰を得る所でありといふべきである。此の旨を瞭解せんとするものは、先づ人は一般に運命の差配を被むらざるを得ぬといふことを豫じめ悟了するがよい。

試みに世界の人を見るに、一人として同じ顔せの者これなきが如く、又一人として福非福を同じうする者はない。人の福非福の同じからざるは、恰も人面の同じからざるが如しと謂つてよい。體格、生命、健康、眷屬、名譽、富貴、境遇、數へ來れば、人生の福非福は千態萬狀といはんよりも實は無限量に差別すといはねばなるまい。例へば體格の上に於ては比較的に福といふべき人も、生命の上に於て非福といはねばならぬ者がある。生命の上に於て比較的に福と謂ふべき

人生の福
非福の差
別

人も、健康の上に於て非福と謂はねばならぬ者がある。健康の上に於て比較的に福と謂ふべき人も、眷屬の上に於て非福と謂はねばならぬ者がある。眷屬の上に於て福と謂ふべき人も、名譽の上に於て非福と謂はねばならぬ者がある。名譽の上に於て福と謂ふべき人も、富貴の上に於て非福と謂はねばならぬ者がある。富貴の上に於て福と謂ふべき者も、其の境遇の上にあつては非福と謂はねばならぬ者がある。

此の如く數へ來れば、何者が複雑なりといふも、人生の福非福ほど複雑なもの恐らくあるまい。

抑も人生の福非福の斯く複雑なるは何故であらう、一面より之を見れば當人の勤惰に依ると謂ふべきである。之を言ひ換へると、其の人の修養の如何に依ると謂つてもよい。果して然らば、修養宜しきを得る者は、必ず好結果を迎へ來つて終生福なりやといふに、事實は之を然りと答ふることを許さぬのである。彼の菅原道真公は文學の達人にして、又實に國家の忠臣であつた。然るに何故彼れは筑紫の配處にあつて、憐れはかなき最後を遂げざるを得んことに

人の成功は天也

なつたのであらう。楠正成と、足利尊氏と、孰れが人格の上に勝れた處があつたのであらう。若し楠正成の方が勝れて居たとすれば、何故に正成の一族は皆斃れて仕舞ひ、尊氏は自ら天下を執るのみならず、十三代の子孫を繼續せしむることが出来たのであらう。吾輩は此に運命の語を應用するにあらざれば、之を解決することが出来ぬのである。唯是等二三の人に限らず、全世界の人にして、運命の語を應用することなく、一生の始終を解決することの出来るものは、恐くあるまいと思ふのである。

「孟子の中に『成功は天なり』と謂ふてある。實にさうに違ない。即ち吾輩が前來陳べ来る所の修養法を説の如く實行するも、幾多の人が必ず一定に成功すといふことは、斷じて望まれない。其は恰も同一の學校を卒業しても、同一の結果を得ることの困難なるが如きものである。昨今一方に成功の旗を翻へし、成功熱に犯されんとする青年があると共に、又一方に修養の軍配を振ひ、此の修養あつて成功の無なる所以斷じてあることなしと確信するも、事實は必ずしもさうは參らぬものである。此に於てか動もすると煩悶病に陥る者がなくとも

宗教的信仰の必要なる所以

申されぬ。蓋し運命といふことを知らざるが致す所である。古人が、
人生分已定。 富貴豈妄來。 不見海底泥。 飛上成塵埃。
と吟じて置いたのも、亦幾分の道理ありと謂はねばならぬ。之に依つて吾輩内觀的修養法として、先づ自己の運命を知ることが最も必要であると思ふ。しかし此れと共に、死の問題を解決し、來世の安慰を得ることも亦た以て頗る大事なことであると思ふ。

然らば内觀的修養法として、自己の運命を知ると共に、又來世の安慰を得んとするには、どうすればよいのであらう。吾輩此に於て宗教的信仰の必要を主張する者である。内觀的といふは、前にも言ふ如く隨分廣い言葉である。何事にあれ、己れの考へが善いとか、悪いとか、凡べて自己が自己を觀察し、自己の是非曲直を判斷して、非より是に向はんとし、曲より直に移らんとするが如きは、皆内觀的修養法と謂つてよい。されど斯の如き淺薄なる内觀法を以ては、自己の運命を知ること、恰も彼の『論語』の中に、死生命あり富貴天にありと謂へる如く、天運を堅く信じて、如何なる厄難に遭遇すと雖も、泰然不動底の人たることは、

到底不可能である。身は陋巷の中に在て、一簞の食、一瓢の飲、以て僅に其の口腹を支へる而耳、人は其の愛に堪へざるものもあるも、己れ獨り其の樂みを改めざる境界に達することは、宗教的信念に依て初めて得らるゝてあらう。乃ち吾輩は其の實例として、此に瀧川壽子女史のことどもを少しく紹介すべし。

瀧川壽子女史は、慶應三年二月五日を以つて、東京市麻布區本村町なる、眞宗大谷派、西福寺の内に生れた人である。寺に子が生れるといへば、異な感じを起す人が或はあるかも知れぬ。されど眞宗の寺は他宗の寺と違ひて、祖師の開宗以來、普通一般の家庭を組織して居る。故に寺といふものゝ一般の家庭と少しも異なつた所は無いのである。故に寺に子が生れたとて、少しも怪しむべき點はない。それよりも吾輩はどうして、まあ壽子の様な、けなげな女史が出来たてあらうといふのが最も、不審なのである。然るに其の家庭をよく尋ねれば、少しも不審はない。壽子の父の名は瀧川鳳巖、母の名は祿子、父の鳳巖氏は故ありて他より早くも瀧川家の養子となり。而も時は徳川政府の末葉に屬し、内外多難のため、自ら意の如く學問する能はざりしを悔み、若し我れに子あれば、己れに

代り相當の人物たらしめんといふのが、壽子の未だ生れざる時の希望であつた。又母の祿子は珍らしき謹慎づよき人柄にして、壽子を已に孕めるや、古に謂ゆる、寝るに側だゝず、坐するに邊よらず、口に邪味を食せず、割め正しからざれば食はず、目に邪色を見ず、耳に淫聲を聞かずといふやうな、胎内教育の心得を以て、其日を送つた人である。既にして、壽子の生るゝや、父母の落膽は男子にあらで、女子たりしにありき。されどまた心を取り直し、女子と雖も之を教育するに於て、何ぞ男子の業を爲す能はざらん。我れ等は是より此の女子を教育して、一個の女丈夫たらしめんと決心したのである。それより壽子誕生の祝にとて、親戚などより貰ひし絹布類は、教育上却つて有害と考ふるのみならず、又幼年の時の驕奢は、後日の運命を縮めるものなりとの考よりして、皆之を他に飛ばし、而も其の教育は、祿子一人の擔任する所となり。壽子三歳の時、已に「三字經」正信偈を暗誦せしめ、亦た遊戯の傍ら、常に二十四孝の話などをして聽かせたといふことである。嗚呼、壽子女史は此の如き芽出度家庭に育つた人である。

壽子女史七歳の時は、即ち明治六年にして、今上陛下教育勅令御發布の翌年

思ひ知るべきである。

時に壽子並に父母もへらく、漢學習字など、東洋の學問ばかりにては、時勢に適せざるべし、兼て西洋の文を學ばざれば、學問を爲したる所詮なかるべしと、終に志を決して、横濱なるフェリス女學校に入りぬ。後故ありて同校を退き、東京英學院に入りぬ。時維れ明治二十年より同二十三年に移る頃なりき。此の間毎週一回、二三の同朋と共に吾輩の寓所當時余は本郷湯島を訪ひ來つて、予に講義を求められしに依り、吾輩は「俱舍」、「唯識」、即ち性相學の大要を講じ、又「起信論義記」の講義、即ち性宗の大要を講じて聽かせたが、其の謹直な態度には實に感心した。今にも其の風彩が眼前に見ゆるやうである。

「老子」の中に被褐懷玉玉を懷くといふ語がある、吾輩の眼中、虚榮多き女子の中に於て、外には褐を被て、内に玉を懷ける者は、獨り此の壽子女史である。而も彼れは最も篤き佛教信者であつた。故に明治廿年二月廿七日附を以つて、眞宗大谷派の本山より、壽子の勉強を賞するため、眞宗假名聖教一部を下附せられたことであつたが、死後彼れがものせし「立志錄」を披き見るに、之を承けた時の

彼れが心の様を左の如く記してあつた。

(前略)つらく、惟れば、是即ち佛の與へ賜ふ所に於て、其教を信ぜしめんと、御手廻にてありけり、又親の教育のあらはれ也、假令之を與ふる人は望み多きにあらざるも、之を賜はる主意は甚だ重し、此の書を誠にせしむるも、我にあり、此の書を反古にするも、我にあり、本山を盲とするも、我又聰明なりとす、るも、我なり、親に榮名を負はしむるも、我又汚名を着するも、我なり、たゞ向後我が信と行との如何にある也。

なんと言々句々、肺肝より出て、又我れの肺肝を鑿つやうな文字であるまいか、而も責めを己れ一人に引受けしことの殊勝さ申すばかりもないことである。賞典も此に至つて無限の價值ありと謂つてよい。

壽子の操行といひ、學問といひ、餘り殊勝なるに連れ、感ずる人も多かりき。本山亦た深く之を好みし、一度洋行させんと、内約が時の重役渥美契縁氏と或る人との間に成り立つて居たのである。然るに父の風巖氏よりして、之を辭退することになつたので、中に立てる者は頗る不審に思ふたのであつたが、後日

壽子のものせる『立志録』に依つて、其の事情が能く分つたのである。即ち彼れは
本山より金を貰ふことを恐れ、山本女史某の紹介に依り、米國ボストン府のミ
ス、アン氏に謀り、自ら彼の地に行きて、傍ら漢學及び和學の教授を爲しつゝ、泰
西の學を修め來る考にて、竊に五年間留學の準備を爲しつゝあつたのである。
左に『立志録』の文を抄出すべし。

我れ明治廿二年の歳末限り、親の厄介を全く離れんとす。古人曰く女子二十二にし
て嫁す、時來りて二十三にして嫁すと。又西洋の事を聞けば、兒生れて二十年を全く
過ごし、誕生日を迎ふれば、其の日より自身にて生活すと。東西事は異なれども、二十
歳に至れば自立するを法となす。又我れ曾て十九年九月に、父と約するに學資を受
くるは今後三年ならんと。然るに丁度二十二年は其の期にして、又古人の女子二十
三にして嫁するの期に至る。(中略)我が學資はつく。大なるものに、幼少より明
年其の期まで十五年間、大凡千二百圓の金なり。若し之を世に施さば大なる益を爲
せしならん。又父母之を貯蓄せば、父母生を安んじたまはん。若し之を法の爲めに
さば大に法に力を盡すの色現れしならん。父母之を何にも用ゐたまはらずして、我が
愚鈍なる身に皆與へたまへり。若し我身徒らに怠らば、父母の勞苦、佛の大恩、皆徒ら
なり。千二百圓其のはたらきなし。然れば勉強して千二百圓の行端をあらはし、父
母を不義に陥れず。如來の大慈を無になさず。其の御惠の程をあらはし、向後幾年にて

壽子女史
の立志

壽子女史
の抱負

も此の身より働き出す者は、皆如來と父母の報恩として、其の身を一生獻すべきな
り。
先づ我は如何せんといへば、自ら今日決意したる日途に向ふて出立せんといふ外
なし。來年中に英學館卒業すべき事。自今年今日に至來年十二月晦日。「論語」孟子「孝經」
「中庸」爾雅「大學」詩經「易」等一通り玩味し。歴史は「資治通鑑」通鑑綱目「元明清史」國語「左傳」
「史記」前漢書等文章は「唐宋八家文」文章軌範「十大家文」等。本邦歴史は「日本政記」大日本
史等にして「古今集」徒然草「和訓考」等を自讀し。外に午後は松本先生に就てリ、タ研
究。日曜日には村山先生に就て文章指南を受くる等なり。ツマリ漢學も一通り、英
學も一通り、英學も英文も一寸出来る様にして、和漢泰西の事實の大略を知りて、
漢英の教師たる様にすべき事也。
次に此の小成に安んぜず活計の路たゞば、是よりは一生懸命に勉強して、漢學は十
三經を求め「書禮春秋」を玩味し。子類百家をも究め。國學は六國史をうかゞひ。物語は
「土佐日記」枕草紙「源氏」榮花「竹取」伊勢等。歌書は「八大集」萬葉集等も涉獵し。英學は更に
意を深めて語學を學び。如此廿五歳まで勉強し、其の上廿九歳まで洋行留學し。卅歳
にして業を擧げんと欲す也。

壽子の此の『立志録』を一讀せん者は、如何なる大丈夫と雖も、己が志の却つて
彼れに及ばざるを見て、歎嗟せざる者恐くあるまい。然るに天は此の人に長壽

を興へざりき。彼れは明治二十三年四月十七日、東京市駿河臺なる佐々木病院に入つて治療を受けしも、藥石其の効を奏せず、同年七月八日午前十一時頃彼の立志録の如き偉大の抱負を懷きつゝ、空しく黄泉の客となつたのである。修養すれば必ず成就する志ある者は必ず成功すといふも、時に不可能の者もあるといふに就き、此は誠によき實例ではあるまいか、眞に好き實例である。此の場合に至り、宗教的信仰なき者は、煩悶苦痛の内に沈み、眞に見苦しき最後を遂げねばならぬのであらう。

然るに壽子女史は、學問と共に、又他に稀れなる篤き信仰を佛教の上に有つて居た人である。故に自己の運命をよく知ると共に、又來世の安慰を得て、死を見ること眞に故郷に歸るが如くてあつた。即ち死ぬる日の朝、看護の母に向ひ、妾は今日こそ佛の御國に參るべき時や、方に来れりと想ふ。母上御太儀ながら、醫局へ御越しあつて、其の時刻のほどを聞き取りたまへかしと乞ひければ、母は早速醫局に趣き之を尋ねしに、今日の夕刻までが大事ならんとのこととなり、之に依つて母は室に歸り來つて涙ながらに事の由しを物語れば、壽子は別

に驚ける色もなく、さらば往生の用意せんとて、手を洗ひ、口を嗽ぎ、豫て病室に祭れる佛像に向ひ、懇に禮拜をなし、それより母に向ひ、二十四年の其の間、たゞならぬ教養の恩を謝し、且つ先き立つ罪の大なるを詫び、又家にある父上にも此の事を傳へてくれよと懇に謝辭を述べて、念佛の聲と共に、午前十一時を報する頃、壽子の息は絶えにけり、憐れといふもまた憐れなりしは、壽子女史の命終であつた。

吾輩此の壽子女史に就いて、毎に聯想し來るものは母の祿子である。祿子は一人の子を前記の如く育て擧げたにも係はらず、其の子は己れよりも先きに立て、而も一年を隔て、夫の鳳巖氏に永の分れをして、養子なる今の西福寺住職瀧川浩君の手に掛つた人であるが、浩君は壽子病没後、早々常並の人であつたなら、殆んど毎日の如く壽子の事が口に顯るゝと共に、浩君及び其の妻なる新夫婦に向つて、色々の愚痴の出て來るのが普通の倣である。然るに浩君の言に依るに、壽子の事は全く忘れたるが如く、而も吾等夫婦の者に向ひ、我が母は未だ會て一言の小言をいはれたことがない、即ち愚痴をこぼされたことが無

かつたと申された。蓋し何故に愚痴がこぼれなんだのであらう。これは外てな
い。祿子もまた宗教の力に依り、現在の運命を諦むることが出来たのと又來世
の安慰を得ることが出来たからのことである。要するに宗教的修養の力終に
此に至つたのである。

俗通
修養論 終

明治四十四年三月廿七日印刷

(正價金壹圓)

明治四十四年四月五日發行

著者 村上專精

發行者 高島大圓
東京市小石川區原町六番地

印刷者 佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町廿七番地

印刷所 株式會社 秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿七番地



發行所

東京市小石川區原町六番地
振替口座東京一五六八六番
電話番町二六〇八番

丙午出版社

文學博士 遠藤隆吉先生新著

◎孔子傳

定價書圓四拾錢 郵税金拾貳錢

現代漢學界の巨擘遠藤博士が深遠なる識を傾け、偉大なる筆を揮つて、こゝに東亞の大聖孔子を傳すと言はば、敢て又別に時流の廣告的文章を列ねるの要なかるべし、試みに少しく言はんか、その涉獵極めて廣汎にその材料極めて豊富にその觀察極めて鋭利にその論斷極めて適確なるは、勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未言の結論とに接するを得るは、洵に本書の特色として天下に誇稱するに足るところ、實くは東洋學術の精髓を味はむと欲する人、靈界の偉人に接して修養の資を得むと欲する人、悉く來つてこの空前にして而して唯一なる「孔子傳」を讀め。

フエヒネル先生原著 第三高等學校 教授文學士 平田元吉先生譯

◎死後の生活

定價金五拾錢 郵税金八錢

フエヒネルは哲學史上特筆大書せらるゝ十九世紀の鴻儒にして、實に今日の經濟的心理學、經驗的美學の基礎を置きし者たり。「死後の生活」は此經驗的傾向の大哲學者が、現世の事實を基とし、最高の詩的想像を交へ、或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱横に叙述したる、詩と科學との靈妙なる融合なり、氏の說を以てせば、千里眼、幽靈等の不思議なる現象も容易に解釋することを得。故に本書は親愛者を失ひし人、死生の疑念に苦しめる者に無二の慰藉となり、一般の讀者に津々たる興味を煽ち、又學者研究者に豊富なる暗示刺激を與ふるや疑ふ可からず。廣く江湖の愛讀を望む。

ベークマン先生著 杉村維横先生譯補

◎改訂強肺術

定價金四十錢 郵税金四錢

肺病を恐るゝものは讀め肺病に罹れるものは讀め歐米に於ける最新式の肺力養成法を讀め此書に六の特色あり。第一、時間を要せざること。第二、費用を要せざること。第三、場所を要せざること。第四、努力を要せざること。第五、言文一致なること。第六、總ふり假名付なること。故に男子は勿論婦人小兒と雖も容易に理解し容易に實行し而して確實に其功を收め得べし。

東洋大學講師 釋清潭先生著

◎和漢名詩新釋

定價金五十錢 郵税金六錢

本書は、漢は唐宋元明清五朝の高僧に涉たり、和は虎關以來海潮堂に至る大凡七十餘人の名詩を新釋したるなり、其詩雄渾なるもの高古なるもの典雅なるもの勁健なるもの婉麗なるもの清秀なるもの幽淡なるもの之れに悉く字解と讀法と評論とを付し平易を旨とし深切を極む和漢高僧詩篇を釋義して此の如きもの恐くは曠前なるべし。

文學博士 村上專精先生編

◎註科原人論

定價金十二錢 郵税金二錢

註科大乘起信論 定價金十六錢 郵税金二錢

文學博士 村上專精先生著

◎改訂自信錄

定價金六十錢 郵税金八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり吾々己の實驗を語り句々心の奥底を披露すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節説いて至らざるなく述べて盡さざるなし、進歩せる佛教學者の見解は此の書によつて窺ふべく敬虔なる佛教信者の態度は此書によつて知るを得べし、今や第六版を發行するに當り更に先生の改訂増補を得て先生の信仰に一大進歩あることを證したるのみならず全然舊版と面目を異にするを得たり、實くは再讀の榮を賜へ。

文學博士 村上專精先生著

◎女性訓

定價金四拾錢 郵税金六錢

本書の内容は天賦中庸其素謙節操の五訓を以て女子座右の箴言とあり、多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女性の缺點を温み來りて之を訓誡すその親切實に至れり、蓋し凡そ世の淑女たるは必ず其の座右を離すべからざる珍書なりとす。

文學博士 村上專精先生著

◎誠のしるべ

定價金四拾錢 郵税金六錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道徳も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず、今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳記せらるる苟も誠を得てして眞の人たらんと欲するものは此書を讀め。

フー、エフ、スタンツラー先生原著エル、ロツシエル先生增訂

◎梵語入門

定價金壹圓 郵税金八錢

歐亞言語の源泉を窮めんと欲する人は梵語を學ぶべし、宗教の千餘萬の人も梵語を學ぶべし。我邦一部人士の梵語を學ぶものあるも彼等は成な歐語の梵文典を使用すされど歐語梵文典を用ひんば第一歐語を學ばざる可からざる不便あり、第二價格低廉ならず今以上二種の缺點を補ひ梵文典に指を導むるの初歩たらしめむがために創めて本書を公にす、自今以後苟も英字母二十六を讀み得る人は僅少なる代價を拂つて悉く梵語を學ぶを得べく梵本を讀むを得べし。

慈雲尊者眞筆 阿滿得壽先生著

◎悉曇阿彌陀經

定價金壹圓 郵税金八錢

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち極樂莊嚴大樂經なり、特に悉曇と冠語せしは新體梵字に簡げんが爲めなり、梵文に加ふるに漢字羅馬字音を附し脚註には馬博士の訂正本との異同をあげ終りに訂正本辭書唐桑二譯を掲げたり、學者此の書に依れば悉曇學の一端を窺ふに易からん。

文學博士 法學博士 男爵 加藤弘之先生著

◎迷想的宇宙觀

定價金七十五錢 郵税金八錢

「吾國體と基督教」を刊行せし以來其批評續々として既に數十種に上れり仍て今般その批評に對して更に批評を試み且つ簡單なる二大問題を擧げて讀者に其解答を乞へり基督教が迷信なりや否や又吾國體に有害なりや否やはその解答の如何によつて解決せらるるを得べしと信ず大方の君子重ねて批評せらるるもあらば幸甚。

著者 敬白

フーナー、フアイト氏原著

東洋大學講師 中島德藏先生述

◎解說倫理學原論

定價金五十五錢 郵税金八錢

フーナー、フアイト氏の「倫理學原論」は快樂論と觀念論との二大立脚地の調和を試みしものにして理論的に卓抜のみに富みしのみならず又當時社會の實際問題を提へてこれに明快なる解答を與へし一新好者なりこれを以て吾國にても大島學士の翻譯によりて已に紹介せられたるあり然るに譯文に慣れぬ讀者は往々その眞意を解する能はざるを遺憾としこれが解説を求むるもの少からず仍て一々質疑解答の勞を省かため各篇各章の順を追うて始と各節毎に其の大意を取り最も簡易に明瞭に讀者をして原著者の意を窺はしめむと力め且つ讀過筆録の際意見を以てこれに批評を試みたるものは本書なり。

講述者 敬白

文學士 渡邊又次郎先生著

◎最新論理學

定價金一圓廿錢 郵税金拾貳錢

本書は斯學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述せる所に依り所論の明晰にして内容の整頓せる簡潔平易なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老練の大家なり又欄外に重要な題目を掲げ卷末に英語を對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし。

新公論社編 ○附錄學生鎖夏法

◎男女學生氣質

定價金二十錢 郵税金二錢

此書は坪内雄藏、柳橋絢子、幸田露伴、村上專精、三輪田眞佐子、佐治實然、山崎ふさ子、奥村五百子、鳩山春子、本多庸一、南條文雄、小杉天外、山縣佛三郎、前田慧鏡、井上圓了、島田三郎、松村介石、磯邊彌一郎、戸川殘花、鈴木芳太郎、石黒忠憲、週塚麗水、中川謙次郎、南岩倉具威、柳橋一郎、寺田勇吉、フオスター、坂本盛徳、加納久宜、古川流泉、田中治六、加藤咄堂、境野黃洋、中島德藏、下田次郎等の大家が、現今男女學生の長短兩方面を觀察し、その長所を助け、その短所を補ふべき方法を示されたるものなり。

文學博士 高楠順次郎先生閱
曹洞宗大學教授 立花俊道先生著

◎巴利語文典

定價金壹圓 郵税金八錢

京都帝國大學文科大學長 文學博士 松本文三郎先生閱並序

京都帝國大學文科大學副手 文學士 羽溪了諦先生新著

◎釋尊の研究

定價金一圓 郵税金八錢

著者は帝國大學出身にして陛下恩賜の銀時計を拜受したる秀才なり今や大學院に在りて専ら釋尊大悟界の研究に従事す本書は實にその近業たり筆を釋尊以前の婆羅門教の理想に起して釋尊當時の印度諸學派の狀態より進んで釋尊の根本思想に説き及び以て釋尊の世界觀人生觀生死問題の解決及解脱の方法を明にし更に釋尊の涅槃に移りこゝに著者の全力を傾倒して詳に涅槃の意義を解し具に東西學者の議論を破る誠ニ教界及學界に於ける尊重すべき一大新研究なりと稱すべし殊に松本博士は嚴密に校閲の勞を執りて研究上の責任を分つ本書の權威以て知るべきにあらずや。

東京帝國大學講師 文學士 常盤大定先生著

◎釋迦牟尼傳

定價金七十錢 郵税金八錢

佛傳の大部を占むるものは神秘なる傳説なり世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖もこれ等の傳説が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見ればその裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし此著は主として是等の傳説の起原を尋ね意義を究め南北兩傳大小兩系の相違を比較對照してこの千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り著者常盤大定先生夙に寫真能文を以て聞え殊に佛傳の研究に従ふものこゝに年あり此著の價值益し推知し得むか。

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天先生著

◎達磨と陽明

定價金七十五錢 郵税金八錢

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼目を豁開して餘蘊なく進徳の工夫修養の方法爲學の用心精神練磨人格養成等一として備はらざるなし眞に是れ精神界の指南針にして亦實踐道徳の指導者なり。

慶應義塾大學講師 忽滑谷快天先生評釋
曹洞宗大學講師 忽滑谷快天先生評釋

◎和漢名士參禪集

定價金五十錢 郵税金八錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の聖帝より北條時頼北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家楠正成等古今の名臣支那に於ては唐の宣宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黃山谷蘇東坡白樂天張無盡裴休等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且つ和漢禪匠に關する逸語笑談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の實績に供する者にして讀者をして坐ながら古今の鴻儒碩學と禪を商量し名僧大徳の錯簡に接するを得しむ。

東洋大學講師 釋清潭先生著

◎寒山詩新釋

定價金五十錢 郵税金八錢

是れ佛か是れ仙か是れ狂漢か得て解すべからざるは寒山詩なり是れ禪詩か是れ詩話か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として抜けざることや著者精深雄大の學と才とを以て一筆句斷彼が面目こゝに於てか露出す寒山詩禪を知らむと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし。

文學博士 三宅雄二郎先生著

◎增偉人の跡

定價金 壹圓
郵税金 八錢

古今東西の偉人十人を選べ、其の時代を語り其の性格を論じ其の功過を明にす觀察警抜にして行文微妙今の偉人の眼に映じたる古の偉人の眞面目は如として其に活動する人若し偉人とは如何なる者か偉人は如何にして修養したるか偉人は如何なる事業を爲せしか偉人は死後に何を遺せしか社會は如何に偉人の死を觀しかを知らむと欲せば莫くば此の偉人の偉者に問へ

文學博士 三宅雄二郎先生著

◎小泡十種

定價金 四十五錢
郵税金 八錢

博士の學殖富強に博士の見識卓越に博士の文章非凡なること世既に定評あり今この學と識と文とを傾倒してこの著を作す政治を論じ宗教を説き文學を語り人物を評すその筆の向ふところ流れては浩浩盪盪さざる大河となり敢ては續紛限りなき飛沫となる小泡か激濤か盪し近代稀有の快著なり

文學博士 井上圓了先生著

◎西航日録

定價金 三十錢
郵税金 四錢

是れ井上博士の洋行土産なり歐米に於ける教育宗教文學政治經濟等の現況は博士が周到なる觀察と輕妙なる文辭とによりて此に躍動す征露の戰爭に於て武名を世界に輝したる日本の國民はまた世界の大勢に通ぜざるべからず請ふ一本を購へ

前文部次官文學士 澤柳政太郎先生著

◎退耕錄

定價金 壹圓
郵税金 八錢

著者の序文に曰く「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも尙ほ腹ふくるゝ心地を忍んで言はざりし者多し」と。知るべし本書は先生が實歷上百般の問題に逢着して滿腔の所感を披瀝したるものなるを諷刺あり教訓あり感慨あり痛罵あり氣焔あり理窟あり警拔にして透徹せる觀察あり大膽にして確鑿なる斷案あり言はんと欲する所は言ひ盡くして毫も時勢に阿らず誠に憂國愛世の大文字なり經世家教育家宗教家及び現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

前司法省韓國法部事務官 白井水城先生著

◎戶籍法釋疑

定價金 四拾錢
郵税金 八錢

附録、改定身分登記例、改定戶籍登記例
戶籍吏並に區裁判所其他戶籍事務監督官廳の戶籍事務に關する百般の疑問を解釋し兼て司法省の解釋方針を示せる者也▲總て司法省の解釋と同様に解釋せると▲明治卅一年戶籍法施行以來一昨年五月末日迄即ち十餘年間に全國戶籍吏並に區裁判所に起りたる實地問題に對する司法省の解決に基き總問題を解釋し類別を設けて編纂しあること▲司法省通牒以外親しく起りたる問題解釋が大部分として蒐集しあること之れ本書以外になき本書の特色なること他の書籍と比較して見られたし

東京帝國大學教授文學博士 高楠順次郎先生著

◎國民と宗教

定價金 七十錢
郵税金 八錢

本書は國民と宗教との關係を述べたる論文に非ずして著者が該博なる學識と深厚なる同情とを傾注して日本人が國民的生活の理想と宗教的生活の理想とを詳説せられたる新著なり苟も日本の國民たるもの日本の宗教家たるものは一讀せざるべからざる佳書たるのみならず行文は通俗平易なる體裁なれば又以て演說講話の好模範たるべし

◎附録として研究上修養上極めて重要な論文十編を收むこれまた實に學界及教界の珍たり

黑岩周六先生講演 丙午出版社編

◎人生問題

定價金 五十五錢
郵税金 八錢

人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり哲人之を説き碩學之を論じて而して懷疑の雲益々密に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黒岩先生自ら人生問題に逢着して疑問の源泉を探り大に其深趣を得て茲に此書あり叙る所神の有無に始まり人生の悲觀樂觀に終る眞に天籟の妙音なり世の悶ある人疑ある人速に來つて此福音に接せし庶幾くは平穩と満足と活力とを得て温く且つ光ある人生に歸着することを得ん

第三高等學校教授文學士 野々村直太郎先生著

◎宗教と倫理

定價金 五十錢
郵税金 八錢

正にこれ新宗教論なり新道徳論なり而してまた實に人生問題最後の解決書なり世の靈と肉との機微に悩めるもの知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗教・舊道徳とに厭けるものは速に來つてこゝに無上の安樂地を見出せ

◎附録、二宮尊徳翁の宗教觀を評す

◎宗教と哲學

定價金 四十五錢
郵税金 八錢

本書全篇十有餘章まづ筆を宗教と哲學との根本問題に起し宗教と道徳研究と信仰等次第を逐つて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論議にある事を闡明す益し病弱なる現代思想界は此書に因りて始めて元氣の回復を求め得むなり

マクス、ミュラー博士原著

◎宗教學綱要

定價金 五十五錢
郵税金 八錢

清水學士佛敎大學に教授として宗教學を講ずるや近代稀有の宗教學者マクス、ミュラー博士の原著を譯本とし隨つて譯し隨つて教ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗教學書としては唯一無二の良書なり

人道講話

前外務大臣 伯爵 林董閣下 櫻所 干河岸貫一先生編

◎修養史譚 定價金 壹圓 郵税金 八錢

林伯爵曰はく「此の書を讀くに古今東西の史乘より異世同軌の事實二百對を擧げたるものにして教師これを用ひば以て講話の資を得べく父母これを讀まば以て庭訓の料たらしむ」と
澤柳前文部次官曰はく「道徳上の實行を期するには先づ之を實行せむとの意志を起さしめることが必要であるそれには人の感興を惹くべき實例を示すのが最もよいしかしその實例を示さうとなると適當なるものが極めて少ない本書の著者は博覽強記能く適當なるものを蒐め來りて其の數頗る多く修身教授上の材料として有益なるものあるを覺ゆ」と

前文部次官 澤柳政太郎先生序

スタンフオールド大學總長シヨルダン博士原著
マスター、オブ、アーツ中村平先生譯

◎人物の修養 定價金 五十錢 郵税金 八錢

シヨルダン博士は當今世界有数の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるゝ紳士なり我國人がその所説その意見を知らむと欲するの情並に之を知ることに依て利すること妙からざるは言を俟たず大方の君子曠くは本書に對し尊敬と同情とを表して博士に報ゆる所あれ

前外務大臣 伯爵 林董閣下 纂譯

◎修養の模範 定價金 七十錢 郵税金 八錢

今の何故に修養せざるべからざるか知らざるもの少しと雖もその如何にして修養すべきかに至つてはこれに迷ふもの頗る多し本書は主として古聖賢が如何に修養したるか教へんがためその美談逸話を纂譯したるものなれば以て青年自修の良師友たるべく以て教育宗家が講壇に用ゐる例話の寶庫たるべし

東洋大學講師 境野黃洋先生著

◎增聖德太子傳 定價金 五十五錢 郵税金 八錢

佛教史家として夙に名ある境野先生が其の燃犀なる史眼と淵熟せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛教の教主たる聖德太子の事蹟を叙述し併て當時社會の政教習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快論斷の適確風に他に其匹を見ざる所

編譯者 ポール、ケイラス先生著 鈴木大拙先生譯

◎阿彌陀佛 定價金 三十五錢 郵税金 六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛教の根本問題也ケイラス博士その彩筆を揮ひ殆ど小説的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりと欲米歐書界に好評噴々たることや 藝社に十年博士と居を同じうし最上紳士と觀善なる大拙居士を煩はして此和譯を得たり豈嘗に佛の有無に關心の不安に關ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや

綱領

- 一、人道講話は村上先生の人道講話を毎號連載するものとす。
- 二、人道講話は教育宗教及び道德の三面を有す。
- 三、人道講話は精神の涵養を以て教育の本領とす。
- 四、人道講話は人道の實踐を以て宗教の要務となす。
- 五、人道講話は父母の孝養を以て道德の大本となす。

人道講話會規約 (入會手續)

- 一、本會は教育道德及宗教に關する講話を直接又は通信に依つて聽かんと欲する者を以て組織す。
- 一、本會の本部を東京市小石川區丸山町十二番地東洋高等女學校内に置く。
- 一、本會は文學博士村上專精氏を推して會長とし其他幹事一名事務員若干名を置く。
- 一、本會は本會の目的を達せんが爲め毎月一回講話會を開き雜誌「人道講話」を發行す。
- 一、本會は何人をも選ばず入會を許す。
- 一、本會に入會志望の者は住所姓名を記し、一箇年以上の會費を添へ本會本部に申込むべし。
- 一、但し會費一箇月金五錢一箇年金六十錢とす。
- 一、本會々員には毎月一回雜誌「人道講話」を無代にて配賦す。
- 一、但し會費前金切の節は會費の納附あるまで雜誌の發送を停止す。

東京市小石川區丸山町十二番地 人道講話會本部

振替東京二〇三三四番

IF5U35

文 學 博 士
村 上 專 精 先 生 三 大 名 著

改訂の**自信録**

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり言々己の實驗を語り句々心の奥底を披瀝すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節説いて至らざるなく述べて盡さざるなし進歩せる佛教學者の見解は此の書によつて窺ふべく敬虔なる佛教信者の態度は此書によつて知るを得べし。

定價金 六拾錢 六
郵税金 八錢 (版)

女性訓

本書の内容は、天職、中庸、質素、謙讓、節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女性の缺點を擇み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡そ世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なりとす。

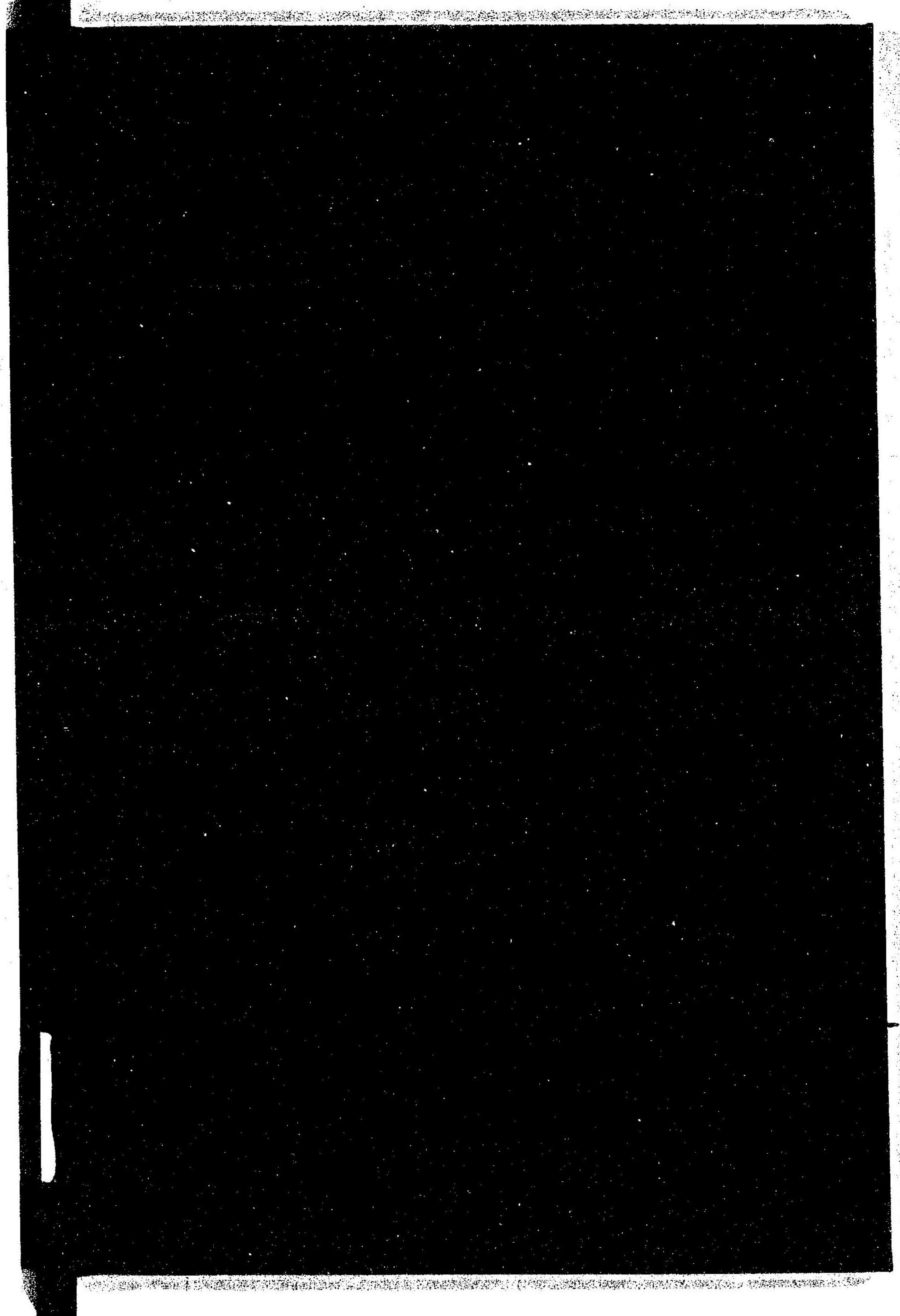
定價金 四拾錢 再
郵税金 六錢 (版)

誠のしるべ

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道德も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上博士古今東西の事例を引いてその然る所以を詳記せらる苟も誠を得得して眞の人たらんと欲するものは此書を読み。

定價金 四拾錢 再
郵税金 八錢 (版)

發行所 東京市小石川原町六丙午出版社 東京市小石川原町六丙午出版社 東京市小石川原町六丙午出版社



335

158

Ⓜ

010171-000-2

335-158

修養論(通俗)

村上 專精/著

M44

AAE-1474

